

# 学校の話

町内小中学校の様子をお知らせするため、定期的に掲載を行っています。

## 〈三加和小学校〉

### 『I（私）メッセージで伝えよう』

学校では、子どもたちが集団生活の中で人との関わり方を学んでいきます。しかし、対人関係で悩んだり自分の言いたいことを伝えられずにストレスが溜まったりすることもあると思います。

本校では「児童が生活上の困難やストレスに直面したときの対処方法を身に付けるための教育プログラム」と「SOSの出し方に関する教育」を行っています。今回は5年生に対して、スクールカウンセラーの鶴先生から「思いが伝わる言葉で話そう」というテーマでお話をさせていただきました。上手くコミュニケーションをとるためには、「なんであなたは、～なの？」など、相手の行いを一方的に攻める言葉や強い命令口調にならないようにして、「私は、～と感じたよ。」「一緒に〇〇しようよ。」など、思いやりをもって優しい口調で伝えることが大切だと分かりました。子どもたちは、ロールプレイで相手への気持ちの伝え方を考えました。例えば、『喧嘩にならないような注意の仕方は?』『誘いを上手にことわるには?』

など、日常生活でよくある場面を想定して考えました。人は言葉一つで仲良くなったり喧嘩したりするものです。低学年の子どもたちにも、『チクチク言葉』ではなく『フワフワ言葉』を使おう! など、イメージしやすい言葉で伝えていきます。

今回学んだことを生かして、これからも、『I（私）メッセージ』を意識しながら楽しい学校生活を送ってほしいと思います。



## 〈菊水小学校〉

### 『当たり前』の反対は？

「当たり前」の対義語は何だと思いますか。正解は『有難い』とのことでした。

『当たり前』は、「有ることが常」、『有難い』は「有ることが難しい」という意味となりますので、「当たり前」の反対は「有難い」となるわけです。

これまで「当たり前」と思っていたことが、そうではないということに、ここ数年の出来事で皆が気づいた（考えた）と思っています。

10年前の2016年4月、熊本地震が発生しました。当時、私は菊水中学校の教頭として勤務していましたが、地震の影響で体育館の天井が落ち、音楽室入口の壁が崩れ、しばらく校舎が使用できなくなりました。その間、町の体育館が教室となりました。毎日、学校で授業をすることが当たり前だと思っていたところ、突然学校が使えなくなったのです。

中学校から町体育館への引っ越しの日、生徒の机を運びながら運動場に目をやると、数えきれないほどのトラックが集合していました。引っ越しを応援しようと、多くの保護者、地域の方々、卒業生が応援に駆けつけてくださったのです。地域の方々の思いやりある行動に感動し、本当に有難いと感じた瞬間でした。この光景を思い出すと、今でも胸が熱くなります。

そして、菊水小が開校した2020年の4月、全国一斉にコロナ禍による臨時休校となりました。今度は、学校に通うことすらできなくなったのです。

それまで、「当たり前」だと思っていたことは、そうではなかったことに気づかされました。今、学校で教育活動が行えることが、本当に有難いことだと感じています。

「当たり前」と思える日常や友達や家族と過ごせる時間がいかに貴重なものであるかを考え、毎日を大切に過ごしてほしいと願っています。



## 生活記録なごみ

伝統や生活文化等の移り変わりを後世に伝える文集として、生活記録なごみが第17集を迎えます。これまで分館のご協力による募集と変更しましたが、今回から自由応募へと変更しました。戦争に関する記憶など、職員の取材による寄稿もできます。たくさんのご応募、ご依頼をお待ちしております。

社会教育課

## 「子ども」の期間限定の

### 暮らしを大切に

近藤 明枝

この春、大学1年、高校1年、中学1年、小学2年、3歳児として進学・進級した子どもの母親として、毎日奮闘中である。我が家にとって最も大きな変化は、無事に大学合格をした長女が、一人暮らしを始めたことだ。子どもたちが全員家で暮らすというフェーズは終わった。ここで、長女がまだ家にいた時期の生活を改めて振り返り、記録しておきたい。朝は高校生のお弁当作りから始まる。子どもたちがそれぞれ家を出る時間に合うように起きているか確認して、起きていなければ声をかける。未っ子の目が覚めたら急いでおしっこに連れて行く。み

んなが朝ごはんを食べたら、大量の洗い物をすませ、保育園の準備をして、バタバタと家を出る。未っ子は家から片道20分の園に通っている。送っていくだけで、一時間使う。

変」ということは、「自分にそれだけの役割がある」ということだ。ありがたい日々のことである。自分が生きるフェーズが変われば、担っている役割も、どんどん変わっていく。今大変だと思ってる担っている役割をこなす時間というのは、必ず「終わり」が来る、貴重な時間なのだ。

仕事中は、自分が集中したいものに集中できる貴重な時間。仕事が終わったら、また一時間かけて保育園と学童保育に迎えに行き、急いで家に帰って晩ごはん作り。食べ盛りの子がいると、作る量も多い！ついでに、洗い物も多い！洗濯物を干したり畳んだりするのは、ほとんど夫、たまに子どもたちや私。習い事の送迎も基本的に夫。長女は、高校の近くの学習スペースで20時〜21時まで受験勉強をしていたので、その時間にはもうバスがなく、私か夫が迎えに行かなければならなかった。「今日はどっちが迎えに行く？」と夫と確認し、行かない方は心おきなくお酒を一杯飲んで疲れを癒せるが、行く方はちょっとガマンが必要だ（笑）。私が迎えに行かないときには、20時半に小学生の次女を寝かしつけながら、一緒に寝てしまおう。その際、残った家事のフォローは夫がしてくれ（いつもありがと〜）。未っ子は保育園でたっぷりお昼寝してくるので、なかなか寝ない…。やっと寝てくれたら、私も夫も、ようやく一日の任務完了である。

私は、「今日は朝起きたくないな…お弁当を作らないといけないから面倒だな…」と感じるときに、いつも思い出すコラムがある。三砂ちづるさんの『抱きしめられたかったあなたへ』（講談社α文庫）の中の「すべてに終わりがあからながいとおしいのです」というコラムだ。「弁当作りにも終わりがある。思春期を過ぎていく息子たちが弁当を持っていくのはあと何年あるのだろう。いつてきますと誰かがわたしのもとから出かけていく日は、あとどのくらいあるのだろう。弁当を作るといことは、わたしのからだ動くということ、作れば持つていってくれる人がいるということ、弁当を作る台所があるということ、弁当の材料をそろえるほどのお金があるということ、食材が苦勞せずに入るといこと…：たくさんの前提条件がそろってできている」といった内容で、これを思い出すと、今、お弁当を作れるってなんて幸せなのだろう、という気持ちになれるのだ。

土日は土日、子どもたちの試合や模試の送迎などが入ってくる。幼い子もいるので、無理してあれこれ連れ回さなくてすむよう、私と夫で綿密にスケジュール調整をしなければならぬ。私も夫も複数のボランティア活動や地域活動をしていたり、土日に入る仕事もあったりで、それらとの調整も必要だ。こうして書いていると、本当に毎日いろいろ大変だった！アピールのような内容になってしまったが、「大

長女が一人暮らしを始めたとはいえ、これからはしばらくは、4人の子どものあれこれでバタバタする日々が続く。今はきつと、後から振り返れば「人生の華」と言える時期なのだろう。こどもたちと一緒に家で過ごせるのは期間限定。「忙しい、忙しい」とばかり言わずに、幸せを噛みしめながら、一日一日を大切に過ごしていきたい。

